ESSAY

# 純度の高い専門性と文化的包容力 ～「日本の国際的地位を高むる途」～

順天堂大学 医学部病理・腫瘍学教授 樋野 興夫

## がん哲学カフェ in UK & 緩和ケアの祖を訪ねる旅

「がん哲学カフェ in UK & 緩和ケアの祖を訪ねる旅」（毎日新聞夕刊 3 月 24 日付「がん哲学外来」海を越えて）を終えた。今回の視察は歴史的大事業であり、参加者にとっては人生の良き想い出となることであろう。

3 月 24 日は、緩和ケアの発祥である St. Joseph's hospice の見学・セミナーに出席した。とくに「First Contact Team」、「Volunteering」のコンセプト＆内容には、大いなる感動を覚えた。「患者視点のチーム医療」の在り方の学びであり、日本国の遅れも痛感した。誇りをもって役割を遂行されている、数百人の多数のボランティアの生き生きとした風貌には、人間の使命をも感じた。

Death Café followed by Caner Philosophy Lecture

This is the first collaboration of Death cafe in UK and Cancer Philosophe Clinic in Japan.

"Cancer Philosophe Clinic" was set up in 2008 where cancer patients and their families can talk about philosophical matters like seeking the "meaning of life, and also the meaning of cancer for them in a relaxed atmosphere by drinking tea or coffee. The idea of "Cancer Philosophy Clinic" has now spread all over Japan. Dr. Hino, the founder, also gives lectures on how he has found his own philosophy seeing society from the views of a cancer cell.

"Death Café" is a discussion group rather than a grief support or counseling session, and its aim is to increase awareness of death with a view to helping people make the most of their finite lives. Mr. Jon Underwood has dedicated his time to spread the idea of Death cafe since 2010.

The event is free

Come, relax, and talk about dying, death and life.

Up to 30people

Send email for booking name and address

info@saintcsu.gakuu.org

☆ Further information ☆

about "Death cafe" → www.deathcafe.com

about "Cancer Philosophy Clinic" → www.saintcsu.org

Date and Time schedule

March 26, 2014 (Wed) Door open 18:00

☆ 18:15～19:50 Death Café

Facilitator

Mr. Jon Underwood

The founder of Death cafe in U.K.

☆ 20:00～21:00 Lecture

"Cancer Philosophy"

～I want to become the Nitobe Inazo (1862～1933) of the 21st century～

Speaker

Okio Hino, M.D., Ph.D.

The founder of Cancer Philosophy Clinic

2nd. Department of Pathology and Oncology, Juntendo University School of Medicine, Tokyo

- Place -

Room No. 101, Birkbeck, University of London

No.5 Gordon Square

Birkbeck, University of London, WC1N, 0HB, Gordon Square, London, WC1N 3QB

☆ Contact M 07951-191045 (Mr. Nakamura PM 6:00 ～ PM 9:00)

3 月 25 日は、ロンドンの街を散策後、日本国大使館を wife と訪問。大使と医務官と面談し、The Athen(a)eum クラブで昼食を食べながら、広々と人生を語る機会が与えられた。何らかの「日英医療協力」に展開できれば最高である。その後、Charing Cross Hospital の敷地内にある Maggie's Centre を訪問した。Centre Head のお話を伺い、存在の目的と意義を学んだ。自由に、ふらーっと立ち寄れる相談の場があることは、患者・家族にとって大いに慰められることであろう。

3 月 26 日は、現代ホスピスの祖といわれる Cicely Saunders が始めた St. Christopher's hospice の見学・セミナーに出席した。とくに「Nursing」、「Social Work & Bereavement〈死別〉」について教育の大切さを学んだ。その後、ロンドン大学に向かった。ロンドン大学では、まず、Death Café の提唱者の話を聴いた後、6～7 名の小テーブルに別れて対話し、休憩を挟み、筆者は講演『「がん哲学～われ 21 世紀の新渡戸稲造とならん～」（「Cancer Philosophy ～ I want to become the Nitobe Inazo (1862-1933) of the 21 century ～」）』の機会が与えられた。会場は一杯で、在英日本人、英国人も、まったくといってよいほどご存じない「がん哲学＆新渡戸稲造」の話を熱心に聴いてくださった。「がん哲学＆新渡戸稲造」は、現代の世界情勢と混迷感のある時代において、日本国の存在を語るのに極めて良いテーマであると実感する時となった。「人間学」は世界共通である。「チアフルな顔付を以て人に接し、見ず知らずの人に対しても、……、それが …… 日本の国際的地位を高むる途である、」（『余の尊敬する人物』矢内原忠雄著「新渡戸博士」より）。

## 人材育成の原点

筆者の母校の鵜鷺中学校（島根県出雲市出雲大社町）が廃校になって久しい。現在は「鵜鷺コミセ

My home town (Udo) in Shimane prefecture
[My background] There are less than 60 people living in the village today. The junior high school I attended has closed and the elementary school has 5 students.

ン」となり地域の交流の場として使用されている。この度、鵜鷺小学校（全校生徒 5 名）が平成 27 年 4 月をもって廃校されることが決定された。大変さびしく、涙なくして語れない。これも生徒数の減少による時代の摂理であろう。最近、筆者は、何故に「小さな村：鵜鷺」で生まれ、育ったのか？　筆者に与えられた「人生の役割・使命」を深く静思する日々である。

今後、鵜鷺小学校の跡地の有効利用が盛んに討議されることであろう。介護関連の施設、終末医療を行う建物としての可能性もあろう。「メディカルビレッジ」の拠点としての活用も考えられよう。空気と水がきれいな「メディカルビレッジ」としてふさわしい環境が鵜鷺地区にはあると考えられるからである。「鵜鷺メディカルビレッジ＝１人の人間を癒やすためには１つの村が必要である」の時代の流れともいよう！　年内に記念シンポ『鵜鷺小学校の終焉を迎えて～「鵜鷺メディカルビレッジ」の時代到来～』が企画される予感がする。「メディカルビレッジ」という言葉が拡がれば、「医療の隙間を埋める」具象的イメージとして、「次世代の日本国」の在り方が広く展開されることであろう。

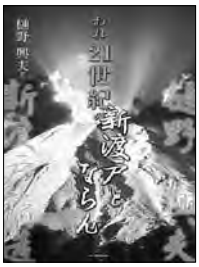
## 「いのちの言葉」

最近、２人の人物についてさりげなく学んだ。１人は、ヨハネス・クヌドセン（Johannes Knudsenr、1917-1957）である。「1957 年 2 月 10 日、神戸港へ向かう貨物船エレン・マースク号（Ellen Maersk）は、航行中、機帆船『高砂丸』が炎上しているのと遭遇。風速 20m を越える強風の中、エレン・マースク号は『高砂丸』乗組員の救助作業に当たる。機関長として乗り組んでいたクヌドセンは、高砂丸船員を救うべく海中に飛び込み、そのまま波間に没した。」とのことである。クヌドセンの「勇敢な行動と無私の人間愛」の根拠に感動した。

もう１人は、有名なヘレン・アダムス・ケラー（Helen Adams Keller、1880-1968）である。３重苦（聴力、視力、言葉を失う）を背負いながらも、世界各地を歴訪し教育・福祉に尽くした。ヘレン・ケラーとアン・サリヴァンとの写真を見ながら、静思した。「ヘレン・ケラーは、２歳の時に高熱にかかり、聴力、視力、言葉を失い、話すことさえできなくなった。両親から躾けを受けることのできない状態となり、家庭教師として派遣されてきたのが、当時 20 歳のアン・サリヴァン（1866-1936）であった。サリヴァンはその後約 50 年にも渡って、よき教師として、そして友人として、ヘレンを支えていくことになる」。ヘレン・ケラーは、３度（1937、1948、1955）来日している。ヘレンとサリヴァンの半生は『The Miracle Worker』（日本語タイトル『奇跡の人』）として映画化されている。英語の「『The Miracle Worker』には『（何かに対して働きかけて）奇跡を起こす人』といった意味があり、本来はサリヴァンのことを指す」とのことである。ヘレン・ケラーが「人生の眼」を開かれたのは「いのちの言葉」との出会いである。学びは、「I am only one, but still I am one. I cannot do everything, but still I can do something; And because I cannot do everything I will not refuse to do the something that I can do. －私は１人の人間にすぎないが、１人の人間ではある。何もかもできるわけではないが、何かはできる。だから、何もかもはできなくても、できることをできないと拒みはしない－」（ヘレン・ケラー）であった。

久しぶりに、自宅の本棚の１つを整理整頓した。１段目～３段目は、「内村鑑三と新渡戸部稲造」、「南原繁と矢内原忠雄」の本であり、４段目は「山極勝三郎と吉田富三」の本である。「内村鑑三と新渡戸部稲造」＆「南原繁と矢内原忠雄」の日付は、医学部の学生

出版（2003年）10周年記念
新渡戸稲造没80周年




I want to become "Nitobe" of the 21 century

British Columbia 大学（UBC）

Royal Jubilee 病院

時代が多い。思えば 40 年前の学生時代に、授業にも出ず夜を徹して読書に耽ったのが走馬灯ように思い出される。「山極勝三郎と吉田富三」は、「がん病理学者」になってからである。古本屋で、安価で『南原繁著作集全 10 巻』を購入したのが懐かしい。『吉田富三先生　人とその思想』（吉田富三先生生誕百年記念寄稿集）の編集幹事としての筆者の「編集後記」（2003 年 4 月 26 日付）を読み返した。「遠い過去を知らずして遠い未来は語れない」（チャーチル）の言葉を引用していたのである。

某テレビ局による自宅の本棚の取材があった。「内村鑑三、新渡戸稲造、南原繁、矢内原忠雄、吉田富三」の本が中心であった。筆者の 19 歳から 60 歳までの約 40 年間の読書遍歴でもある。取材後、定例の読書会に出掛けた。この読書会は、2007 年 12 月 9 日から開始し、7 年目に入った。継続の大切さである。『武士道』（新渡戸稲造著）、『代表的日本人』（内村鑑三著）を中心に進め、毎回 15 ～ 20 名の参加者との、2 時間の楽しいひとときである。先日は『後世の最大遺物』（内村鑑三著）を読み、アフリカの探検家のリビングストン（1813-1873）とピューリタン革命指導者のクロムウエル（1599-1658）を学んだ。

## 対話学のすすめ

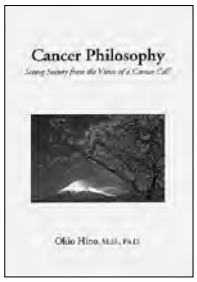
全国国立病院院長協議会関東信越支部総会･勉強会で、『がん哲学外来～医療の隙間を埋める～』（東京文化会館）、放射線安全管理研修会で、特別講演『今、時代は「先楽後憂」から「先憂後楽」へ』（文京区シビックホール）の機会が与えられた。聴衆の職業・分野が異なると、同じスライドを使用しても反応が違うことの良き学びの時となった。まさに「風貌を見て、心まで診る＝病理学」の真髄を肌で感じた。筆者は「5 歳の子供から 80 歳の老人にも、同じ内容を語るように」と、若き日から教わった。その根拠はここにあろう。

「中皮腫パネル」（順天堂大学）で、診断困難な難治性中皮腫の多数の症例に接した。「高い純度のある、がん病理の専門性」の深い学びであった。引き続いて「文科省がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン採択事業」の 2 日間の研修会（順天堂大学）に出席し、「閉会の辞」で「対話学のすすめ」を語った。早速、「締めのお言葉が胸に響きました、誠に有難う御座いました。」と身に余るお褒めのメールをいただいた。「人材育成の原点」の気づきでもあった。今後、医学部、看護学部、薬学部などの医療関係の学部学生に「対話学」の導入は、時代の要請となろう。課外授業、街の中の学び場所の提供も必要となろう。

葛飾区中央図書館で『がん哲学外来～良い読書との出会い～』の講演の機会が与えられた。会場は満席であり、多数のコメント・質問をいただいた。驚いたことに、聴衆の中に、1984 年「新渡戸稲造　5,000 円札」の決定に関与された当時の大蔵省の官僚の方がおられ、講演後、挨拶をされた。大いに感激した。公立図書館での「がん哲学外来・カフェ」は、悩める患者さんにとって、来やすさと安心感のある雰囲気を醸しだすことであろう。医療の隙間を埋めるためには、密度的に、全国に 7,000 カ所は必要と考える「がん哲学外来・カフェ」にとって、全国の図書館での常設は最適であり、時代的使命を痛感した。「良い読書」は、「良い先生」、「良い友」とともに、人生邂逅の「絶対性大原理」である。

## 人生のリセットの形成的刺激

最近の大きなニュースは、なん



といっても「刺激だけで新万能細胞～ STAP（Stimulus -Triggered Acquisition of Pluripotency）」（朝日新聞 1 月 30 日付）であろう。「マウスの体の細胞を、弱酸性の液体で刺激するだけで、どんな細胞にもなれる万能細胞に変化する。」とのことである。今後、追試を含めて検証されることであろう。外部からの「形成的刺激」によって、細胞は簡単に「初期化・リセット」されることになる。「がん細胞の良性化」・「がん細胞のリハビリテーション」の現実性の実証ともなろう。「がん哲学＝がん細胞で起こることは、人間社会でも起こる」から生まれた、「がん哲学外来＝言葉の処方箋」は、まさに「人生のリセットの形成的刺激」でもある。

今度、『“われ、太平洋の懸け橋とならん”～新渡戸稲造が語りかけるグローバリズムの本質～』のタイトルで講演を依頼された。驚きである！　思えば、筆者が本業の「がん病理学者」から「陣営の外」に出たのは、2000 年の国連大学での、新渡戸稲造『武士道』出版 100 周年記念シンポからである。この「一点突破」がここまで展開するとは、本当に不思議である。早速、「先生の御専門の分野での長年にわたる努力が、広範囲の総合的な知見の必要性の観点から、まさに『一点突破、全面展開』という感じで、御専門の範囲を超えて受容されつつあることを思い、御同慶に堪えません。」との、感慨深い、温かいお言葉をいただいた。

## 『がん哲学』出版 10 周年

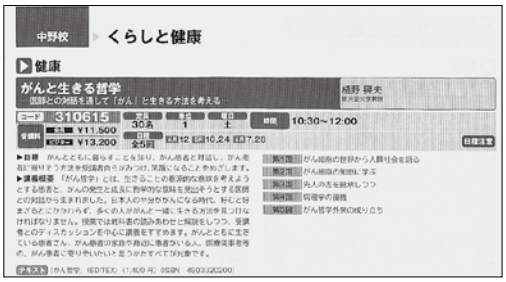
『われ 21 世紀の新渡戸とならん』（2003 年）→『がん哲学～がん細胞から人間社会の病理を見る～』（2004 年）→英語版『Cancer Philosophy～Seeing Society from the Views of Cancer Cell～』（2009 年）がここまで展開するとは、筆者の思いを超え本当に不思議である。思えばアメリカからの帰国後、1991 年に『内なる敵』というタイトルで雑誌に依頼連載、新渡戸稲造の『武士道』100 周年記念シンポ（国連大学）への参画、2001 年～ 2003 年の雑誌連載、2003 年の「吉田富三生誕 100 年記念事業」の務めが、『われ 21 世紀の新渡戸とならん』、『がん哲学～がん細胞から人間社会の病理を見る～』の発刊につながった。筆者は何故か、小学生、中学生時代に日記を付けるようにと教師から躾けられた。毎日の生活を静かに丁寧に観察する時を与えられた。半強制的な教育が、いつの間にか習慣化した。今に思えば、真の個別的な教育的訓練であったのであろう。

医師・医療従事者に向けた「対話学」の勉強会『樋野塾～がん哲学～』の開講の企画が、さりげなく進められているようである。早稲田大学エクステンションセンター中野校講座で、「がんと生きる哲学」（https://www.wuext.waseda.jp/course/detail/3588/）が開講された。「『がん哲学』とは、生きることの根源的な意味を考えようとする患者と、がんの発生と成長に哲学的な意味を見出そうとする医師との対話から生まれました。」と紹介されている。

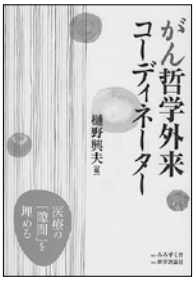
「時代を動かすリーダーの清々しい胆力」としての「人間の知恵と洞察とともに、自由にして勇気ある行動」（南原繁著『新渡戸稲造先生』より）の文章が思い出される今日この頃である。「国民の理想とビジョンをつくり出すのは、根本において教育と学問のほかにはない」（南原繁）。「がん哲学＝がん細胞から人間社会の病理を見る」の「全面展開」の時代的背景の到来のようである。

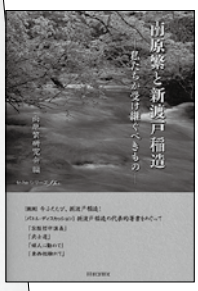
日曜患者学校（樋野興夫の「がん哲学学校」）

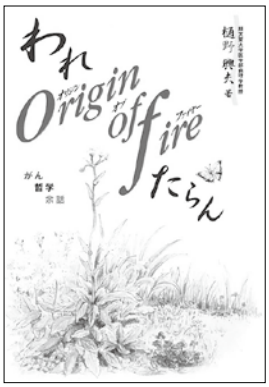
ラジオ NIKKEI　9:00〜9:30pm スタート　毎月第１日曜日
朗読：アナウンサー




著書 他






ESSAY